

スーダンかつさら随想録 <その2>

ソルガムと天水農業

首都ハルツームからカッサラにむかう途中、ナイル川からはなれるにしたがい一面に広がっているのがソルガムの畑だ。雨季になると緑色濃く 2m 前後高に生い茂り、乾季には涸れあがり、刈りあと地が放牧・採草利用される。ソルガムは日本では一般になじみがうすいが、世界的にみるとコムギ、コメ、トウモロコシ、オオムギについて 5 番目の流通量をほこる穀物である。



ソルガムの収穫



さまざまな品種群

スーダンでは、地中海農耕文化複合由来のコムギも河川灌漑スキームでは作つけがみられる一方、新大陸農耕文化複合由来のトウモロコシはほとんどみられず、古くエチオピア高原を発祥地とするソルガムが現在においても広大な畑地で優占している。しかもほとんどは降水依存の天水栽培となる。かたわらでトウジンビエが栽培されることもある。スーダンではソルガムはキスラ(発酵パン)、アスィーダ(練りもの)などの伝統食品、ヘルモル(ラマダン時に飲む)などの飲料として利用される。穀粒が主要な食料となると同時に茎葉は重要な飼料資源であり隣国へ輸出もされている。



発酵飲料ヘルモルの原料



ソルガムのジュース

スーダンでソルガムは依然として重要作物であるが、不安定な天水条件下で栽培されているところに大きな特色がある。天水農業にはしばしば博打の要素があるとされ、インシャーラー(神のみぞ知る)農業などと揶揄されたりもする。人為的栽培のコントロールの外にあって、意のままならないのが天水農業というわけだ。カッサラにおいてもソルガムの大部分は天水栽培で機械化天水地区と伝統的天水地区とよばれる区域で行われている。機械化天水地区は、年平均降水



普及員と農家



生育したソルガム

量が 400—500mm であり、イギリスの間接統治時代から耕耘機、播種機の普及がすすみ大農を中心としたソルガム、ゴマの作つけがおこなわれている。他方、伝統的天水地区においては、年平均降水量が 200—300mm と相対的に少なくなっており、簡単な道具を使った手作業での耕作・播種・除草が牧畜民によりおこなわれている。伝統的天水地区で機械化に対する投資がすすまなかった一因として、平均降水量が少なく、より気候・環境条件がきびしかったからであろうと推察される。



干ばつ年の不良生育



製粉所



品種アクラモイの穀粒

乾燥地に生きる農民たちは天水農業のきびしい状況のなかで、適応品種を選びだすことや雨のタイミングをはかりながら適期栽培を試みるなどの在来技術の工夫をおこなってきたとおもわれる。今回は、このあたりの方策や改善策について、すこし掘りさげてみたいとおもう。



茎葉の飼料化



天水畑